

オーラ:「輝く」という事

1. スポーツ選手の輝き

右掲は、幕の内に入った頃、大銀杏を結えない状態で上位陣を脅かして人気を得た遠藤関の写真です。ところが、永谷園の商業にも出るようになったのは良いのですが、幕の内上位で勝ち越せないでいるのです。これでは、後発の逸ノ城に人気を奪われても仕方がないのです。まあ、永谷園も少し早過ぎたのです。



スポーツの世界は勝負という事でハッキリしています。テニスでは、錦織選手がメジャーの全米オープンテニスで2位になり、その後、マレーシア・日本で開催された大会で連続優勝して世界ランクも6位に上がるという活躍をしています。この錦織選手の活躍によって、松岡さんがクローズアップされたり、松岡さんのスクールで錦織選手と同じであったというTVアナウンサーが登場するのです。

この遠藤関と錦織選手の対比が重要なのです。遠藤関は負けが込んでいるので、輝きを失って、どんどん、小さく見えるのですが、逆に、小柄な錦織選手が勝つ事によって輝きを増して、はるかに大きな存在になっているのです。「オーラ」という言葉がありますが、まさに、「勝負の世界」が物語っており、シンプルに「勝つ」という実績がオーラの源泉なのです。

2. 「オーラ」= Σ (小さな成功)

オーラは普通の人にもあるものです。例えば、元気な時は誰の眼にもハッキリと映ります。右掲は三代目浪速楽笑と名乗っておられるBMW販売店の会長をされている田中さんです。「笑うてなはれやあ〜」と言うのが信条の方ですが、この笑うことが重要な事とおっしゃっているのです。確かに、笑っている方が他人に緊張感を与えないので商売人には重要なことと言えるのです。お客様が来ないことには商売は始まらないのです。私のようなコンサルティングで「先生」と呼ばれても「笑顔」がよいか「しかめっ面」がよいかと言えば、「笑顔」の方が万人には好まれますが、しかし、何かを主張するには「笑顔」では本気度が伝わらないケースが多いのです。



これは「向日性の原則」というものがあり、例えば、「人気の長嶋、実力の王」と呼ばれたように、同じような実績があれば明るい人の方が好まれるのですが、真の意味で「オーラ」という点では、王さんの記録が物語るように実績に基づく発散するもの(人間力)で上回っていると思うのです。これは、人気と違うものなのです。

少し視点が違うのですが、イキイキしている状態の時は「オーラ」を発しているのです。このイキイキが一般人には重要な事なのです。「小さな事」が良いのですが、何か夢中になっている人は輝いて見えるものなのです。改善の世界で「とりあえず主義」というのがあって、大きな目標を掲げても、とりあえず手が出せることから始めて、順にレベルを上げて「いける、いける、いける・・・」と成功の循環を回すことが重要なのです。この成功の循環は、王さんや錦織選手のような大きなものではなくても「実績」の積み重ねで輝きをもたらすのです。

その小さな実績の積み重ねで自信というオーラが生まれて、その上に「笑顔」「笑声」が加わると本物のオーラに近づくのです。確かに、肩書だけではオーラは生まれないのです。同じ肩書きでも実績を積み重ねている方には、にじみ出るオーラがあるのです。この湧き出るオーラが重要なのです。「オーラ」= Σ (小さな成功)と言えるのです。「小さな成功」に夢中になっている状態こそ一般人のオーラではないかと思うのです。

3. ポケット・マネーでオーラ

中小企業家同友会の「3つの目的」の1番目は「よい会社をつくろう」とあり、その実践に自主的近代化により強靱な経営体質をつくとあります。まさに「強靱な経営体質」がビジネスの根幹であり、その下に「安心して働ける」という状態が担保されるのです。これを公式化すると

$$\text{「強靱な経営体質」} = \Sigma (\text{自主的近代化})$$

となるのです。

確かに「勝ち組」と言われる企業の特長の一つに

$$\text{「常に新しい商品・技術・サービスを打ち出している」} \equiv \Sigma (\text{自主的近代化})$$

があるのです。「自主的近代化」と一口に表現しますが、全ての近代化が成功するというものではなく、中には、うまく行かない近代化もあるのです。まさに「種まき」と同じで、撒かない種は実らないのです。逆説的には、「撒く余裕」が必要なのです。

私は、「ポケット・マネー」と表現していますが、「若い人に失敗しても構わないからこの金でチャレンジせよ」と気楽にチャンスを与えることがポイントと考えています。ノーベル賞が話題になっていますが、3人のうちの中村さんは社長のポケット・マネーで誕生したと言われていています。中村さんは徳島県の日亜化学工業に就職したのですが「青色LEDの研究をしたい」と直訴して研究開発に従事したのです。もちろん、簡単には開発が進まず行き詰った時に、オーナーから5億円という資金を頂いて研究開発に没頭して成果(量産技術)を開発したのです。まさに、オーナー社長であった小川信雄氏の器量の大きさの賜物なのです。中小企業ならではの話であり、しかし、並みの社長では出来ない芸当です。

このような事は、経営者の心掛け次第で可能な芸当なのです。自分のポケット・マネーで社員の能力を引き出すというのは、昭和の時代にはよくあった事なのです。ポケット・マネーを出せるほど所得があることがポイントなのです。何も5億円という大金でなくても十分な話が多いのです。身近なところでは「数万円」という金額でも十分なケースもあるのですが、ポケット・マネーとして身銭を切る勇断ができるか否かなのです。

4. 「輝き」(オーラ) = 「自主的近代化」 = 「ポケット・マネー」

今の時代は、若い人の意欲を引き出す事が重要な経営課題なのです。中小零細企業の場合、「どうせ頑張っても同じや」と無気力な人が多いのです。仮に、中途採用で入社したとしても面接の際には「夢」を語っていたのではないかと思うのですが、いつの間にか消えて並み以下の社員になっているのです。

しかし、その「夢」は三波春夫の「チャンチキおけさ」の歌のように「杯」に浮かべて酒を飲む材料にしてくれれば、まだ、いつかは前向きな愚痴になって活路が開けると思うのです。社員と夢を語る「夢を肴に」というスタイルが難しくなっている時代ですが、トップやリーダーの姿勢次第という面もあるのです。この際、「ポケット・マネー」が物を言うのです。厳しい会議の後に、現場のリーダーに金を渡してガス抜きを行わせる仕組みが重要なのです。人の心は「反転作用」が働くのでガスを抜けば、明日から「前向き」になって進めるようになるのです。

卑近な「ガス抜き」というレベルでも「前向き」になれば、各自「自主的近代化」に取り組むようになるのです。「これでは・・・」という現場の熱い思いこそ「オーラ」の源なのです。この現場の熱い思いを引き出すのにコミュニケーションも飲みケーションもあるのです。人と人の関係性を深める魔法の仕掛けであり、多くの先輩方もやってきたことなのです。Σ(自主的近代化)と集めるからパワーになるのです。バラバラではパワーにならないのです。